

2007年3月南太平洋諸国飛び回り

井上 A. 尚

昨年2回のフィジー調査で大目標の *Papilio schmeltzii* の生態の見当と、現地大学との共同研究化の目処が付いた私は、遂に他の南太平洋諸島の *Papilio* に対象を拡大することにした。今回の調査行は奇跡的に、上司の同意や南太平洋大学からのセミナー招聘書が得られた為、全行程出張で行けることになった。そのため金回りについての心配が軽減され、とことん調査に専念することが出来たのは幸運だったが、日程を最終決定する段になって週3便就航していたエアパシフィックの成田ーナンディ線のうち月曜着発の1便が運休となり、大幅な日程の変更を余儀なくされた。それやこれやで職場の事務方さんやトップツアーの寺阪さんには大変なご苦勞をかけることになってしまった。最終的に南半球へは毎日就航の日本航空の東京ーオーストラリア線を利用し、その先の南太平洋諸国間はエアパシフィックを使うことにした。更にフィジー近隣諸国間は深夜早朝便を使うことで最大限の調査時間を確保した。各目的地では、今迄に3回出掛けたフィジーのビチレブ島は大体道路状況を掌握済ということでレンタカー(セダン、AT、AC、2400cc)を使用し、また初めて出掛ける国のうち、バヌアツではガイドブック等で有名なサウスパシフィックツアーズ(2名の日本人が常勤)の事務所を併設しているポートビラのメラネシアンホテルに宿泊し、チャータータクシー等の手配を依頼することにした。ただ残りのサモアについては現地旅行会社の日本人職員との事前調整がうまく出来なかったこと、目標とするアゲハ=*P. godeffroyi* の詳細な情報が殆どなかったことなどから、厳しい戦い?を覚悟した。この予想は的中し、サモアではアゲハを見ることは出来なかったが、次回へ向けてのある程度の情報を得られたことは事実で、今後更に機会を作って出掛けようと思った。また残念ながら今回は萩谷先生御一行との団体行動はとれなかったが、一応、先生方の実習の参考になりそうな情報もいくつか確保出来た。

*2007年2月25日 フィジー ビチレブ島 タワタワンジ村 恐怖の大増水

実際に日本を出たのは23日の深夜で、シドニーへは24日早朝に到着したが、ここで乗り継ぎが5時間空いてしまい、更に時差の関係でフィジー到着は24日18:40(以下、時刻は全て現地時)。空港で日本から手配しておいたトヨタカムリを借り出し、ついでに未決定のままだった3月11日~12日のナンディースバの往復と、11日のスバのホテルの確保をATSパシフィック社に依頼し、既に夜の闇に包まれた19:50にコーラル

コーストの馴染みのホテル＝クロウズネストへ向け出発。途中の道は状態の良い舗装道路で幅も広く特に危険箇所はないが、気を付けなければならないのは暴走防止の為に道のあちこちに『コブ』が作られていることで、これに気付かずに突っ込むととんでもないことになる。これを防ぐには、適当なスピードで走っている車の後を適当な車間距離で追走すること、及び集落や町に近づいたら素直に減速標識に従うことである。ウシやウマに関しては、センターライン寄りを走っている限り問題はない。先を急ぐのでヒッチハイカーにはゴメンナサイを繰り返しつつ快調に飛ばして約 1 時間でホテルに到着。またお世話になりますと挨拶。

25 日は、昨年数回 *P. schmeltzii* を観察出来たタワタワンジ集落へ行くべくシンガトカ川左岸の道＝カバナガサウロードを遡行。天気は曇|晴。基本的に非舗装だが特に危険箇所はなく平均 40km/h で走っていく。ところが大体行程の 2/3 は走ったかなと思った所で、前方の橋の辺りに渋滞が発生しているのに出くわした。車から降りて近づいたら、何と橋を渡った向こうで、道幅の 2/3 程度の路盤が長さ 1m 近くに渡って流出し、車が通れなくなっている。それでも地元のピックアップトラック等は崩落した部分にタイヤの幅分の板を渡し、片輪をそれに載せながら通り過ぎていたが、一般車は危ないから止めておいて、と言われてしまった。そこで仕方なくシンガトカ市街まで引き返して川の右岸のシンガトカバレーロードを遡行し直したが、1 時間以上のロスとなってしまった。

タワタワンジ集落行きの渡し舟がある場所の近くの路上に車を止め、川岸まで歩くが、これがまたとんでもなくぬかるんでいる。あっという間に靴が泥だらけになった。更に川岸の崖まで来てまた愕然とする。昨年はこの崖の下に川原の砂場があり、船着場は崖から 10m 以上向こうだったのが、崖の直下まで川の水が来ており、崖からボートに直接転がり込むような感じになっている。向こう岸にいた馴染みの船頭さんが気付いてこちらに舟を寄せてくれたが、水量が多い分流れも速く、どんどん下流に流されてしまう。やっとのことで、私がいる崖の直下に舟を寄せてくれたが、今度は私が乗った舟が浅瀬で座礁してしまい、動かなくなってしまった。周囲の人たちも水の中に入って舟を押し出してくれたが、対岸の目標に付けるのもまた一苦労だった。

やっどこさ渡り終え、畑の間の村への道を進む…筈が、畑の中に新しい道が作られていて、それを進む。元の道は完全に沼の底



に沈んでいた。村の前に到着し、今日の行程について話し合う。彼によると、この日はタワタワンジ村を含むシンガトカ川中流域の村人たちがここに集い、増水対策会議を行っているらしい。来る時にカバナガサウロードで見たピックアップトラックは、この会議への参加者輸送用だったようだ。今年の雨季の降水量は半端ではないらしい。村人も今日に限っては客人対応どころではないようで、挨拶抜きで直接ポイントへ通してくれた。なお彼から『Dr. 萩谷はどうした』と聞かれたので、1週間程後に来る予定だと答えた。彼の案内で、昨年9月に見つけた村の東側の斜面のアゲハポイントに出掛ける。雨でやられたのか全体的にチョウが非常に少ない。ウラナミジャノメ類が目につく程度である。*P. schmeltzii* もポロポロとは飛び出す、時間の関係からか花には来ない。結局、この日はここには12:00から14:30まで張り込んだが、*P. schmeltzii* の絵は撮れずじまいだった。帰りは村人2名(うち1名はコロニサガナ村の住民)にシンガトカ市街へのヒッチハイクを頼まれ、了承。ホテルに帰還。

＊2月26日 コロレブ(シンガトカ川中流域)にて地質学的新知見？

この日は前回紹介した *P. schmeltzii* の好観察地と言われる『コロレブ』へ行くことにしていたが、前夜ホテルで旅行ガイドをみていたら、この地名が明日行くつもりでシンガトカ川上流域だけでなく、海岸沿いの何ヶ所かにもあるのに気付き愕然となる。実はこの『コロレブ』は『大きな村』の意味で、この名前だけではどの『大きな村』かを判断するのは難しいらしい。そんなことを考えながらとうとうしていたら、未明になって外が急に喧しくなった。何と例の暴雨である。この降りは明け方まで続いたが、08:00を過ぎる頃からはどうにかかなりそうになったため、少し遅めの08:50にホテルを出た。

途中迄は昨日も走った道で楽勝気分。市街より少し上流寄りの道端にいた小学生2人を乗せ、学校最寄りの分岐路まで乗せて行った。コロニサガナ村を通り過ぎ、いよいよ今迄走ったことのない地域へ入ったが、道はやはりある程度整えられていて走り易い。尤もこの区間はまだナンディへ抜ける裏道で、問題はこの道が分岐した先である。しかしそこを通り越しても道はまあまあで、特に急な登り坂も出て来ず多少の上り下りを繰り返すのみ。チラチラと見える川幅もタワタワンジ周辺と殆ど変わらない。山も相変わらず丸禿状態で、いつになったら源流域的な雰囲気になるのか見当も付かず。やがてそこそこ大きな集落の前を通ろうとした時、道端にいた2人連れが止まってくれの合図。『何処へ行くの?』『この先のコロレブへ』『えっーっ!!』どうやらバスを待っていたのが待ちくたびれた所へ私が通り掛かったらしい。もう1人そこへ行くのがあるので乗せてくれないか? という依頼。しめしめ、この連中を乗せて村に入れば不審

者/車扱いされることはないだろうと勘定し、了承。この判断は、道案内人の確保という点でも正解。最終的に車は 11:20 に 81.3km を走破して、乗客?らが『ここがコロレブだ』という集落に到着。村の地形は途中のコロニサガンナと同じで源流域の霧囲気は皆無。源流域にはここから更に道無き所に道を作りながら進まなければならないようだ。『こんな所へ何しに来た?』『実はチョウの写真を撮りに』それなら川原の辺りに沢山いたというので、今度は乗せて来た人物が案内役を努めてくれた。確かにリュウキュウムラサキなどは飛び交っているが、*P. schmelzii* の姿はなし。客人らの家に通して貰い、カバではなくオレンジジュースを頂いていた所、騒ぎ? を聞きつけた別の家の人物が『ちょっと見せたいものがある』と言って誘いに来た。この家の人物も是非どうぞ、ということだったのでついて行ったが、この途中でようやく *P. schmelzii*

名目撃。集落内の自動車も通れる道に沿って飛んでいたもので、今迄本種を見た場所の中では一番明るい場所だった。この人物は小さなケースに入れた砂粒のようなものを出して来たが、よく見たら、その所々に金色に輝く粒子がある。何と砂金だった。島の北側の山中には昔から金脈が知られており、バツコウラはその採掘中心地だが、島の南側に鉍脈が出て来ているという話は、従来知られていない可能性が有る。これはひょっとするかも知れない。



一休みした後、別のチョウがよく見れる場所を紹介するというので、そこから少し下流の学校のある集落まで移動する。案内してもらった先はランタナの群落のある場所だったが、このころから天気が急速に悪化し、チョウは殆ど見れず。シンガトカ市街まで行きたいという人物を乗せ、14:00、取り返しのつかない天気になる前に出発。思った通り途中暴雨に見舞われ、長大水溜まりの中を突っ切る破目にもなったが、おかげでこの 2 日間で上から下まで泥だらけ+埃だらけになった車両が、かなり綺麗になった。客人を無事送り届け、私もホテル着。お礼に貰ったバナナは大変美味だった。夕刻、3月 11 日~12 日の手配をお願いした ATS パシフィックから連絡があり、手配は何れも問題なく完了とのことだったが、ついでに聞いた話で、2 週間ほど前の集中豪雨の時にはナンディとシンガトカで床上浸水の被害が出たらしい。シンガトカはまでも本来乾燥地域のナンディでこの被害とは、今年の降水量はやはり尋常ではないようである。

*2月27日・28日 新ポイント発見!?

この両日はコーラルコースト〜パシフィックハーバー間の川沿いの小道を遡行し、新しいポイントを探索した。狙いをつけたのは27日が有名なハンディクラフトセンターのある町=Vatukarasaを流れる川に沿う道、28日がNaboutiniからナブア川上流域のNabukelevuへ抜ける川に沿う道としたが、このうち28日の道はクイーンズロード〜ナブア川間の山脈横断の道で、危険な割には得るものが無いと判断、結果的に28日も27日の場所を再調査した。結果的にこれが正解となる。

27日はやはり朝方大雨となり、予定より多少遅めの09:00に出発する。目標の道はやはり未舗装だが、充分セダンで通れる。驚いた事に、この道沿いは相当原植生が残っているようで、森林実習の場としてはタワタワンジ村周辺よりもむしろ好適ではと思う程である。道端には例のシソ科植物も結構生えていたため注意しながら車を走らせていたら、集落近くの群落に*P. schmeltzii*が来ているのに気付く。しかし車を止めて脱出するのに手間取り、ここでは逃げられた。暫く張り込んで見たがそうそうは出て来てくれそうもないので先へ進む。道は時々、山腹へ上がるが、基本的には川のすぐ横を走っている。ところが暫く走ったところで道が川の中を横切る場所にぶつかってしまった。ここは流石にセダンでは渡航不可能、ましてこの水位と流速では4WDでも手に負えまいと判断、残りの時間は、来る途中で*P. schmeltzii*を見かけた場所に張り込み直す事にしたが、やはりこの日は天気も今一つでろくな事にならないまま終わった。

28日も朝は小雨で大体09:00にホテルを出たが、前掲の通り本来の目標から転戦して11:00に昨日も車を停めた場所に到着、周囲を歩き回る事にする。この頃から天気は回復し、青空が広がった。暫くして昨日*P. schmeltzii*を見かけた場所より少し下流寄り、原植生的な林の中に入る道が分岐している場所を発見、中に入ってみた。程なく道端に見覚えのある幼木が出現。*Micromelum*だ。撮影し、他にはないだろうかと辺りを見回したら、何とそこら中*Micromelum*だらけで、50cmにも満たない株から4~5mはあろうかという大木、更には多数の蕾をつけている木まであった。あちこちの木を巡って撮影をしている所へ*P. schmeltzii*が登場。やはり木陰を縫って飛んでいく。これは当たったかと思い、そのまま張り込むことにしたが、やはり♀チョウは居なかったようで産卵行動などの記録は作れず、幼虫も見つからず、また林床にはこれと言った花も無かった為、訪花行動の記録も作れずと、多



少残念な結果になった。しかし長期間張り込めば必ず何らかの結果が得られると確信した。15:00 にポイントから撤収。

*3月01日 綺麗な♀チョウの絵、Get!

フィジー野外調査最終日のこの日はやはりここに行く。今日は朝から天気は良好。10:10 頃からいつもの熱帯魚展示施設の前に張り込んだが、花壇の様子がおかしい。馴染みの職員さんから話を聞いて驚愕する。何と先日の集中豪雨時に、この園内を流れる小川も 2m 方水位が上昇し、花壇の一部が水没して植えてあった花が流出したらしい。残った株も何とか再起中という所で、花の数が昨年来た時に比べて相当少ない。*P. schmeltzii* は時々飛んで来るが、花に着地する様子はなし。ということで、今日は園内を歩き回って別のポイントを探すことにしたが、沢底からかなり高い位置に付けられた木道を歩行中に、明らかに食草を探していると思われる個体を発見。このチョウは直射の落ちない林内の地上 50cm 位のところを飛びながら時々植物の葉に調べを入れる、という動作を繰り返していた。ただしこの行動は、この日は 1 回だけしか観察できず、産卵を押さえることも出来なかった。この日も昼前頃から快晴の天気となり、気温が急上昇して歩き回るのが辛くなったため花ポイントの前で一息入れることにしたが、メインの花から少し離れたベンチに座っていた所、地上すれすれの低い所にあるペンタスの花に何か来ていたような気がした。急いで行ったら *P. schmeltzii* が 1 名来ていたが、このチョウの腹部側面を見た瞬間、これは♀チョウだ! と直感。残念ながら決死の形相で近づいた為か、このチョウは直ぐに逃げてしまったが、この分なら暫く待っていれば戻って来るかもと判断。やはり少し離れた所で待っていたら、思った通り再度やって来た。今度は少しゆっくり目に、カメラを回しながら近づいた。明らかにさっき逃げた♀チョウ。♂チョウに比べて腹部側面のクリーム色の 2 本の線がはっきりしていて、ぽちゃとしたお腹によく似合っている。この♀チョウも今度こそはしっかり食事をしたかったようで、カメラを直近まで近づけても逃げずに花から花へと飛び歩く。時間的には長くなかったが、相当なアップ映像も撮らせてくれたこのチョウには感謝。その後、園内をもう一度巡回していたところ、今迄見落としていた *Micromelum* と、明らかにナンヨウアワダンとは違う *Melicope* 類があるのに気付く。まだ両方とも 30cm 程度の高さしかなかったが、これらが適当な大きさになって来た時、

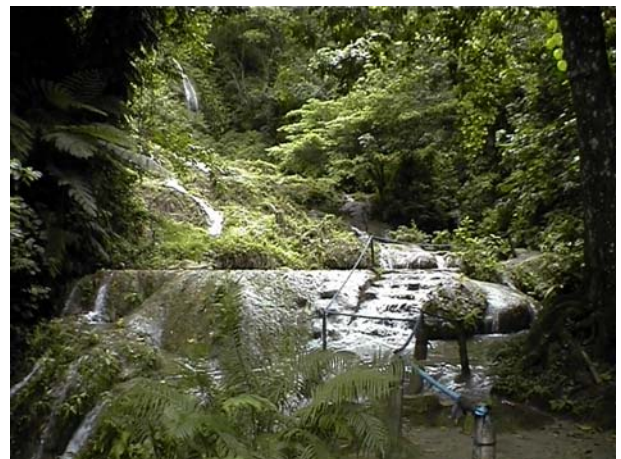


P. schmeltzii♀ チョウたちがどういう反応を示すかは見物である。

この日は夜行便でバヌアツのポートビラへ移動するが、その前にナンディ市街地の旅行会社に 17:00 までに寄って、手配を依頼しておいた 3 月 11 日~12 日の移動と宿泊について確認するため 14:00 に退出に掛かる。途中、今迄に入ったことのなかった鳥舎に入ってみたが、『これはアゲハの行動観察用に使える!』と直感した。14:30 に施設から退場。車を置いてあったホテルには 15:00 に戻って出発。旅行会社には 16:35 に到着。クーポンの受け取り/支払いは OK。レンタカーの返却期限と搭乗手続開始にはもう少し時間があったので、空港より少し北のブンダポイントまで往復。18:40 に無事車を返し搭乗手続。ポートビラのホテル迄の移動も快調にこなす。

* 3 月 02 日 1 日目にして仕事終了!?

首都とは言えポートビラの市街地は主要道路沿いの幅 500m、長さ 2km 程度の範囲に集中しており、その外側はすぐに田園地帯/原野である。事前の打ち合わせ通り宿泊したホテル内の旅行会社サウスパシフィックツアーズ=SPT の事務所に 07:00 に出向き、この日の行き先を決める。といっても何処へ行けばこの国名物のアゲハ(以前は *P. canopus* とされていたが、最近では *P. fuscus* とするようになるので、ここでも以後は *P. fuscus* とする)に出会えるか等という情報は無く、取り敢えずは渓谷沿いに行きたいと言った所、それなら島の西側にある有名な滝が良いのではと紹介された。市街からはそんなに遠くないということで、会社の車を一日借り切り、09:30 に出発ということで了承。



ところがこの直後から市街地は一瞬大雨に見舞われる。ここでも雨は要注意だ。少し早めにドライバーが来てくれた為、09:10 に出発。目的地には 30 分で到着し、取り敢えず滝を見学しにかかる。全体の雰囲気は、明るい溪流ということで気分は良い。実際、何種類かチョウも飛んでいる。しかし *P. fuscus* は結局この滝周辺では見れなかった。滝への遊歩道から駐車場に戻ったのは 11:00 で、まだ市街地に戻るには早過ぎる。近くにどこか面白そうな場所はないかと思ったら、駐車場から 500m 程市街地寄りに、雰囲気の良い『南の島の国の村』があった。自動車道路脇にミカンの木が何本かあったのでもしやと思い近づいたら、いきなり『えっー!!!』何と、かつてアンボンで見た *P. fuscus* 幼虫と瓜二つの幼虫が目の前のミカンの葉の上に座っている。*P. fuscus* の所属については幼虫や蛹の形状からルリモ

ンアゲハ系とする見解もあるが、ミカンから全く幼虫が見つからず、民家周辺に寄りつかない *P. schmelzii* ならいざ知らず、*P. fuscus* は交配実験の結果と言ひ、民家のミカンにベタベタ幼虫が付くことと言ひ、明らかにシロオビアゲハ系である。後は類例を重ねるのみで、道路沿いのミカンを調べ、計 4 名の幼虫を観察した。そして遂に、民家の間を縫って飛ぶ成虫を確認。しかし異様に小さいアゲハである。以上、この島の目標はこの日だけで殆ど片づいてしまった。ただし途中から村の暇人が手伝うと称して気色の悪いガの幼虫だのクモだのを持って来るようになったり、やっと出て来た成虫を寄ってたかって追いかけて回したりして却って作業が妨害されたことに加え、昼過ぎからは天気が良くなり過ぎて頭がくらくらしてきて仕事にならなくなってしまった。幸い、状況を察知した集落の 10 才位の女の子がペットボトルに入れた湯冷ましを持って来てくれた為、これで回復。また村人が家の中で昼寝に入って回りが少し静かになった中、初老の男性が日陰で作業をしているのに出会い、ちょっと立ち話をした。彼からは『この集落にはチョウが多いが、今日のような天気の日にはチョウが花に集まるのは朝方だ』という貴重な証言を頂いた。14:10 に集落を出てホテルに戻る。ところがこの後、15:00 過ぎ頃から一天俄に掻き曇り、例の暴雨となった。



* 3 月 03 日 島一周の旅

前日夕方からの雨はこの日の朝まで断続的に続き、08:30 からはまた空は真っ暗、雨足も強くなった。このためこの日は取り敢えず街中の図書館に行くことにした。市街地の図書館は土曜でも開館していたが、中に入った途端に司書の女性(60 歳代かも知れない、大変丁寧で上品な感じの人物)に訪来目的を尋問された。正直にチョウの文献を探しに来たと言ったら大変感激されてしまい、ここにはないが博物館の一角にある別の図書館 = 国立図書館には確か数点あった。普段はそっちで働いているが、今日は向こうが休みなのでここの応援に来ている。是非、月曜に出直してきて欲しい、と教えられた。ということで、今日のここでの作業は一瞬で終了。

ホテルの SPT 事務所に戻り、どうするか思案していた所、日本人職員の土山氏から『市街地が大雨でも島の特に北側はあまり強い降りではないことも多いので、出掛けてみたら?』と助言して貰う。どうやらブチレブ島と同じ理屈らしい。ドライバーも付き合

ってくれるというので、時計回りで島一周ツアーをやって貰うことにし 09:30 に出発。昨日の集落を通過すると出てくるのがこの島名物の一つの急坂である。この時点でもう雨はほぼ上がっていた。これ乗り越えると島の西海岸へ出るが、この途中、道路脇の花に目標の *P. fuscus* が来ているのに気付く。車を停めて貰い撮影に降りたが、このチョウも林内のやや日陰寄りの花に好んで来るので、手前の雑草が邪魔になってなかなか綺麗に撮影できなかった。西海岸沿いの草原を通る区間では、道の両脇に樹木の花があり、これにリュウキュウムラサキやシロチョウ類、マダラ類が来ていたが、ここでは *P. fuscus* は無し。この道を北上すると、やがてもう一カ所の急勾配区間に出る。ここは、距離は前の急坂より短いが、ツルツルの岩盤が道路上に露出している為車の動輪の空転が頻発し、むしろこちらの方が厳しいように感じる。一体、どんな岩石から出来てるんだと思って岩盤を見たら、何と立派なサンゴの化石が浮き出していた。



ここを乗り越えると今度は島の北海岸沿いの平地の集落の一つに出る。集落は道の海側にあり、山側は多少ヤシの木が植えられた疎林になっている。濃藍色のシソ科植物も多く、シロチョウを中心にチョウが集っている。ちょっと見て来たいと言って車から降りた所に、*P. fuscus* がやって来た。やはりシソ科植物に吸蜜にやって来る。場所の好みも *P. scheltzii* 同様『上を別の木で覆われた明るい日陰』のようだ。ここでは何とか見せられる訪花映像を確保。



どうかこうか持っていた空から、また雨が落ちて来た。この先に地元ドライバーがよくチョウを見たことがあるという場所が何箇所かあったが、何れもマリーゴールドその他を中心とした日向の花壇で、*P. fuscus* の場所としては不向きで通過。ホテルには本降りになった 15:30 に戻る。

* 3月 04日~05日 1日目~2日目の場所でデータ採り増し

当初、この島で *P. fuscus* が見つからなかった場合には、もう少しソロモン諸島寄りの

エスプリツァント島等に移動しての調査も考えていたが、こうなった以上は今回はここに落ち着くことにし、残り3日間は図書館+昨日迄の2箇所のポイントで作業することにした。実は前日(現地の人の給料日翌日の土曜)の夜に市街地中心でタンナ島出身者とアンブレム島出身者が諍いを起こしたのが外出禁止令に発展する大騒ぎとなり、まずいことにこのうちのタンナ島出身者が、どういう事情か2日に出掛けた集落=MeleMaatに集められることになったらしい(この話はSPTの大数加氏より取材)。ということで出掛ける先をどうするか思案したが、ちょうどまい具合にこの時期東海大学の海洋実習船がポートビラに停泊しており、4日は土山氏が同大学の学生を連れて滝の見学に行くというので、私もその近くのMeleMaatに行くことにした。何かあってもSPTの方の近くに居れば、情報もすぐに貰えるだろうと言うことである。

予報では4日のエフェテ島は大雨ということだったが、朝のうちは薄日がさす天気ですべて済んでいる。行った先の集落での作業は前回同様だったが、今回は、私の標的を皆が理解してくれたようで、次から次へと『あの木に大きな幼虫がいた』『この木には少し小さいのがある』と声を掛けてくれた。その度にメモカードには次々に幼虫の画像が増えていったが、やはり若齢の模様はクロアゲハ八重山に本当にそっくりだなあと改めて感じてしまった。12:00になり、集落の人から『そろそろタンナ島の住民がやってくるので、町へ帰った方がよい』と言われ、ホテルに帰還。その途端、予報通りの爆雨となった。昨夜の騒ぎもこれで『水入り』となってくれればよいが。

5日も朝の天気はあまりすっきりしなかったが、これなら何とか期待できると踏んで08:40にホテル発。途中、島の南側を走行中に一瞬強雨に見舞われたが、その後は薄曇り~薄日程度で推移する。この日はオフロード対応車で来たので途中の急坂も何のその。ポイントには10:00に到着。ドライバーは少し先の集落に友人が居るので、そこで雑談その他をやって来てても良いか、というので、それじゃ12:00になったら取り敢えず戻って来て、ということで別れた。前回同様*P. fuscus*はポロポロとシソ類の花にやってくるが、訪花動画は前回撮ったので、今日はむしろミカンの木に注目する。その結果、遂に1カットだけだったが、ミカンの新芽に産卵する♀チョウの動画撮影に成功した。更に周辺のミカンの木を調べ、ここでも幼虫たちの発見に成功。今までの観察例からすると、ここの*P. fuscus*は『他の大木や建物の日陰の部分に生えている、高さ4m程度以下のミカンの木の、地上2m程度までの新芽に好んで産卵する』ということになると思う。この他の観察事項としては、ヤエヤマアオキ=現地名『ノニ』の若い実にナミエシロチョウが集まっていたことだろうか。これだけ判れば、もうここには長居は無用。12:10、戻って来た車に乗ってホテルに戻り、明日の出発に向けての準備に入る。この日は東海大学の学生も夕食をここで食べていた為、暫くぶりに日本

語を使う機会に恵まれた。

*3月06日 図書館にて文献リコピー

何故かこういう予定を組んだ時に限って日中は殆ど快晴。しかし雨と同様、晴天時の暑さも半端ではない。少々の雨なら気温はそこそこ上がりチョウは出て来るので、撮影するにもむしろ光が分散する曇りや小雨の時の方が良いように思う。チェックアウト手続きや荷物の発送を終えた後、図書館に向かう。最初、一緒に建物に入っている博物館を見学。岩石、化石、昆虫の標本もあったが、日光晒のため特にチョウの標本は褪色が酷い。出迎えた件の司書さんは、何と所蔵しているチョウの文献リストを作って待っていてくれた。実物を出して貰う。バヌアツ、ソロモンに関心を持って島毎に各種の分布調査を行っている英国人の文献が数点、中に今回、バヌアツ内での *P. fuscus* の島毎の変異を扱っているものもあり、リコピーして頂いた。司書の方によると、この島でチョウの文献を調べにここへ訪れた日本人は初めてで、また是非おいで下さいと言って貰った。

16:10 発のナンディ行きに乗るべく 15:00 にホテル発。終始お世話して下さいだった SPT の皆さんには深謝(皆さんもバヌアツへは、”<http://www.rexgroup.co.jp/office/index.html>”に御相談の上、お出かけを。『バヌアツの事ならすべて私達にお任せください!』という宣伝文句に誇張はない!)。搭乗予定者が早く集まったのか、飛行機は 16:00 に出発、ナンディにも順調に到着。ところがここで乗り継ぎの飛行機に大幅な遅延が発生し、アピア到着が 3 時間以上遅れてしまった。

*3月06日その2 右も左も判らないサモアのウボル島にて

フィジー-サモア間には日付変更線が有るので、こうした奇妙なことが起こる。アピアのホテルに到着したのは 05:00 で、殆ど休めないまま夜が明けてしまった。ホテルは、海岸辺ではチョウを見るのには不相当と考えて少し山寄りにあるアウトリガーにしたが、これが今回の主たる敗因になったのはほぼ確実である。というのはこのホテルは居心地こそ不満は無いもののしっかりしたツアーデスクがなく、情報収集には 1km 程離れた海沿いの道にある観光局やツアー会社のオフィスまで行く必要があり、晴天時はともかく今回のようにいつ爆雨にやられるか判らない天候の時には出掛けるのが億劫になってしまう。一方で、ホテル周囲はこの島特産のアゲハ=*P. godeffroyi* が *P. fuscus* と同じような性格なら期待できる環境ではあったが、心配していた通り *P. godeffroyi* はむしろ *P. schmelzii* と同じ性格のようで、かなり原生林的な場所まで行かないと見れないようである。簡単に歩いて行ける場所に居ないならどこへ泊まっても

同じで、こうなると判っていたら、アシの確保が容易な街中の方に宿をとるんだっただと後悔することしきり。

到着時に空はどんよりと曇っていて 07:30 頃から雨となったが、幸い 09:00 には天気は回復したので、観光局へ出掛けた。この近くの旅行会社『パシフィックインターナショナル』にはガイドブック等で著名な日本人＝小林 秀野氏が勤務されているので日本から問い合わせたが、流石にチョウについては全く判らないとのことで、当時 JICA から観光局へ出向していた大塚氏を



紹介していただいた。しかし氏もやはりチョウに関する問い合わせには面食らったようである。とりあえず滞在している島を 1 周したいと希望した所、同島の有名ホテル＝アギーグレイスホテルの並びにある旅行会社を紹介された。出掛けて行って手続き。OK。翌日以降は、この様子を見て出かけ先を決めることにした。なお大塚氏は、私からの連絡を受けて以降注意していたところ、チョウをデザインした切手が発行されているのに気がついたという。街中の郵便局へ行ってみたら何種類かある切手のうちの 1 つに、*P. godeffroyi* をデザインしたものがあつたので数枚購入。結局、これが今回この島で見つけた唯一? の *P. godeffroyi* となった。

* 3 月 7 日 ウポル島は火山岩の島

08:00 に旅行会社に出向く。客は私 1 人だけ。基本的には滝で泳いだりどこかで食事をしたりというのも含まれているそうだが、その辺を全部省いてチョウ観察に都合の良さそうなところで張り込ませて貰うことにする。アピアからまず海岸道路を東に向かう。道路沿いは結構集落が並んでいて、原植生が残っている場所は皆無。途中、Falefa の滝から島の一番東の Tafaga ビーチまでは若干内陸部を通ったが、やはり『ここなら!』と思えるような場所は特になし。Tapaga 岬からは南海岸を西に向かい、所々にある滝に寄って貰う。このうちの Togitogiga 滝(右図)は、林間公園のような広場が造られてしまっているものの、遊歩



道が川原に降りられるようになっていて、この部分についてはかなり期待出来そうな感じだった。しかし *P. godeffroyi* はおろかそれ以外のチョウも、フィジー、バヌアツに比べて格段に数が少ない。結局やはり *P. godeffroyi* はゼロ。その後もこれと言った環境には出会えないまま、アピア市街へ戻ってしまった。そしてこの1周行で判った事は、この島は殆どが火山岩から出来ていて、ビチレブ島やエフェテ島のような『石灰岩地帯を集中攻撃』といった戦法は使えないということだった。

*3月8日~9日 路線バスは当てにならない

8日は地元の人たちにも人気があるという『Papase'ea Sliding Rock』に行く。観光案内によると1時間に1本は路線バスが通っているということで、市街地のバス乗り場に張り込だ。ところが1時間30分待ってもバスは来ず、結局タクシーを頼む。行きがこうなら帰りも危ないと考え、乗ったタクシーに13:00に迎えに来るように依頼。ここは前日のTogitogiga滝と同じ雰囲気、溪流沿いには原植生的な感じの林が残っている。しかしチョウも昨日同様で、天気が終始曇天だったこともあり、大した記録は残せず。



9日は朝から曇天・強雨で調査は諦めたが、10:00頃からは少し空が明るくなって来たので小林氏と大塚氏に今回の結果報告に出掛ける。時々雨が強く振るが、そういう時には売店その他に逃げ込んで買い物がてら雨宿り。また市内の図書館に向いて関連する文献がないかどうか探して貰ったが、こちらは不発。ところが観光局でツアー紹介のリーフレットを細かく見ていたところ、モノクロの不鮮明な写真が数点入った『Samoa on foot』というのがあるのに気がついた。よくよく読んでみたら遊歩道から外れて林の中を進むツアーのようで、これに初日に気がつかなかったのが、今回のもう一つの敗因か？ このツアーはアピア在住のフランス人が個人的にやっているようで、人数が集まらなると出掛けてくれないらしいが、次回調査時には要注意だ。

アピア市内での行動は13:00に終了。ホテルに戻る頃には目も眩む程の快晴となり、予定を変更してホテルを通り越し、そのまま山の方へ向かって進むことにした。ところが30分程歩いた所で一転俄にかき曇ったかと思うと、例の爆雨になった。ホテルに逃げ帰った時には全身ずぶ濡れ。幸い雨は1時間ほどで上がり晴天に戻ったが、その

後の時間は服や靴の乾燥に費やすことになってしまった。

翌 10 日は早朝便でナンディへ。日付変更線を西へ横切ったので私の 3 月 10 日は 4 時間程で終わった。ナンディには 11 日の 05:00 頃に到着。スバまでは国内線で移動するが、予約便より 1 つ前の便に時間的には乗れそうなので、変更して貰えるかどうか打診。OK で、スバの定宿ホリデイインには 09:00 に到着。部屋も開いていたので、すぐに入れて貰えた。この日は好天だったが外出は止め、翌日発送する荷物を整えたり、昨日ずぶ濡れになった衣類を洗濯したりした。

* 3 月 12 日 スバの南太平洋大学理工学部にて 遂に研究体制発足!

午前中は会計や荷物の発送後、11:50 に USP の Linton WINDER 先生の部屋へ行く。WINDER 先生達は私の出国後にこの日の午前中に来て欲しいと連絡したようで、待ちくたびれていた。時間変更の連絡を私が日本を出発した後の私のパソコンに送った為のトラブルだったが、何かあったらクロウズネストかホリデイインに連絡してくれと伝えておいたことには気がつかなかったらしい。16:10 のスバ発ナンディ行きに乗る為、14:20 にはここを出たい所だったが、ぎりぎりまで持参したプレゼンテーションファイルを使ってフィジアンアゲハの見どころや、周囲のアゲハとの関連性その他につき WINDER 先生、今年からこのチョウの研究をやることになった修士学生、そしてその直属の指導教官に解説。更に、もう私がフィジーの野外で一人で網を使う必要はなくなったということで、ネットその他一式を研究室に進呈した。国内移動は OK。その後、この日はブリスベン行きに搭乗。同市内で一夜を明かし、翌 13 日の JL 昼行便で帰国すべく空港へ出向いた所、新しいオーストラリア産のチョウの図鑑が置いてあった。2 冊購入。これが今回最後の成果となる。その後、無事帰国。

ということでバヌアツは今回 1 回でほぼ片づいたし、フィジーも先行き明るくなりつつある。次回はサモア+ニューカレドニア+ソロモン等と考えていたら、そのソロモンで大地震が起きてしまった。これがどういう意味の『御告げ』かは慎重に判断するべきと考えられる。